



アドベンチスト

はらしゆく

August



「お盆」 東京中央教会国際部牧師 マーク・デュアート

作家の小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）は、かつて「日本は、死者に支配されている国である。」と言いました。彼は、日本文化の中軸には、死者の魂を尊び大事にする感情があり、それがどれほど強いものか、ということをやったのです。祭や迷信や仏教についてはそうした死者に寄せる思いを抜きにしては、多くを語れません。

日本における大切なお祭の季節の一つは、「お盆」です。何年も前に、ボランティアの宣教師として日本にいたとき、私はいろいろな人や英語の学生に、「お盆」の意味を尋ねた覚えがあります。明確な回答をもらうことはまるでできず、得た回答はばらばらでした。そのため、私は、もしも、私たちがしていることの意味をクリスチャンでない人に質問されたら、私たちクリスチャンも、ちょうど同じように、当惑しているように見えてしまうのではないかと考えさせられました。

ある日キリスト教の出版物に「お盆」の起源についての話が載っていました。その話について私が覚えていることは、次のとおりです。お断りしておきますが、この話は、あくまでも、死者の状態について非聖書的な解釈をしている仏教の話です。

仏陀のある弟子の母親が亡くなりました。弟子は、母のことを思うと寂しくてたまらず、霊界で母と話ができるようにしてほしいと、仏陀に懇願しました。すると、仏陀がまず言ったのは、霊界は生きている人が見るものではないということでした。しかし、弟子はあきらめようとしません。なおも懇願し続けますので、仏陀は哀れに思い、とうとう彼に霊界を見せることにしました。弟子が見たものは、恐ろしい、ちぢみ上がるような光景でした。なんと、母は逆さ吊りにされ、その舌はあまりの渇きのために膨れ上がっていたのです。彼は、この拷問が、母が生前に犯した罪に対する罰であることを知らされました。たとえ生きているときに悪人でなかったとしても、母は、その贖いのために何千年も逆さ吊りにされなければならなかったことでしょう。

弟子は仏陀に、「どうか母にお慈悲を。二三日、私にその痛みを和らげ、のどの渇きを癒してやる時間をください。」と懇願しました。仏陀はこの願いを聞いてやり、弟子はお盆（TRAY）にいろいろな茶菓を載せて母に出しました。これが、「お盆」の名前の由来です。しかし、数日後、弟子が再び茶菓を母にふるまうことを許されるまで、母親は、もう一度逆さ吊りにされるために、霊界に戻らなければなりませんでした。

聖書は、「すべての人は罪を犯し」（ローマ3：23）「罪の支払う報酬は死である。しかし神の賜物は、わたしたちの主キリスト・イエスにおける永遠のいのちである」（ローマ6：23）と教えています。誰も、何千年もの間、逆さ吊りになって、もがき苦しむ罪の罰を受ける必要はありません。イエス様が、私たちの贖いのために、既にこの地上で十字架につけられたからです（ガラテヤ3：13、コロサイ1：19～22、2：13～14）。イエス様は、私たちが救うためだけでなく、仕え、そして義の僕になることを教えるために、この世に来られたのです。

これこそが、わが愛する日本人たちが必要とする「お盆」なのです。

「アメリカでの楽しい学びを終えて」

及川 律

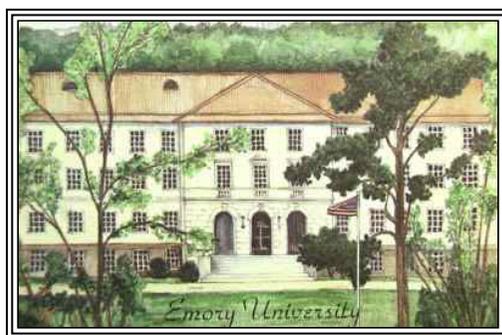
中央教会の方々にお別れをし、アメリカへと旅立ったのが四年も前のこととは思えません。夫婦二人で、年老いて飛行機に乗れなくなる前にどうしても果たしておきたいと思っていたことがあり、無理を承知で、周囲に色々と迷惑をかけながらも、なんとかその夢を完結することができました。家内の経験は、またいつか別の機会に報告させていただくとしましょう。

私の学びは、**礼拝における音楽**がどうあるべきか、という課題に取り組むことを中心に展開したのですが、答えが出るどころか、もっと深く広い世界に引き込まれてしまったようでもあります。まず入った学校は、**ジョージア州のアトランタにあるエモリ - 大学の神学部**でした。メソジストの伝統をもつこの学校は、アドベンチストのルーツを探るにも適した場所でした。日本人は私ただひとり。SDAは私のほかに一人だけでした。数人の元SDAだったという神学生達と出会うこともでき、学ぶことが多く与えられました。授業では、南アフリカの人権運動の指導者、**ツツ司教**をはじめ、著名な神学者のクラスを受けることができ、これは神学に対する私の考え方を大きく変えるものでした。

私が専攻した**礼拝学**と**賛美歌学**は、当初予想していたより遥かに広い分野で、他の分野と密接に関わっていることに驚かされました。自分が簡単な答えを求めて、学問を始めたことが間違っていたことに気付きました。学べば学ぶほど、わからないことが、次々と出てくるのです。いかに学ぶ態度が欠けていたかを、思い知らされました。また、教授達の、学問に対する真剣で真摯な態度に心をうたれました。いかに私の信仰が思い込みの固まりで、自分自身で突き詰めたものでなかったかが、良くわかりました。

私が探ろうとしていた、『**キリスト教の礼拝の歴史とSDAの礼拝形式の起源および背景**』に関する学びは、エモリ - 大学での修士の学びだけでは収まりきらず、アンドリュース大学に持ち越されました。**アンドリュース**では、大学院の指揮科で**音楽史**と**合唱指揮**を専攻し、大学の三つのコワイヤーの副指揮者として、若い生徒達を相手に楽しい音楽生活をしながら、SDAという教会はいったいどんな教会なのだろうという疑問にも取り組む日々でした。とりあえず私が出した結論は、SDAの本質はアンドリュースにあらず全世界の個々の教会にあり、ということでした。これから、中央教会において、この答えを自分なりに検証していきたいと思っています。

礼拝学に関しては、いかにして、礼拝の本来の中心であるべき**聖餐**をいかにとりもどすことができるかということ、そして、**日本人の価値観と心情にあった礼拝形式と音楽**はどんなものなのかということ、しばらくの研究課題にしようと考えています。



[左] キャンパスの中でおそろいで [上] エモリ - 大学のカード

「あなたは人生を精一杯生き抜かれた」 ~加藤道子姉を偲んで~

SDA所沢キリスト教会牧師 新名 幹二

加藤道子姉は15歳で母親を亡くされ人間存在の弱さを感じ取られていたのでしょうか。結婚し二人の子供を持ち家庭仕事をしながらも、何かを求めておられたのでしょうか。ご主人様の仕事で旭川市に移り、1975(昭和50)年9月6日初めて旭川教会に見えた時、とても嬉しそうにしておられました。当時、加藤姉は42歳の背の高い、姿勢の良い、とても上品な感じの人でした。姉は、10月家庭聖書研究会に参加し、次週には洗礼クラスにも併せて参加される宗教熱心な方でした。12月13日に洗礼を受け、SDA信者となりました。

信仰が喜びだったのでしょう。嬉しそうなお顔の姉を、毎週教会で見ることができました。加藤四郎様も当時のことを「家内は教会に行きだしてから大変明るく元気になりました」と語って下さいました。姉は、旭川教会に2年半ご在籍でしたが、信仰に忠実でした。洗礼後も聖書研究会に参加し続け、送別会前日までそうされました。さらに教会大掃除・料理講習会・夏期聖書学校・子供クリスマス会等に積極的に参加し、ご奉仕下さいました。月曜日の聖書研究会にも出席を続け、遂にはご自宅を開放して、聖書研究会を開かれました。やがて、その求道者のうちのお二人が後に洗礼を受けられました。加藤姉は、人々の前で目立つ方ではなく、人々の後ろにいて神様と人々のために力を尽くされていく実に素晴らしいお方でした。

加藤姉と再会できたのは、22年後の昨年5月でしたが、そのお人柄は、昔と変わらず、控え目で優しさが溢れていました。秋頃体調が悪くなり、今年7月11日遂に病気の故に逝去されましたが、姉は神様から与えられた人生を精一杯生き抜かれたと思います。40年以上にわたって家族を愛し、家族の幸福のために、毎日、目立たないけれども絶対に必要な生命を育て守っていく働きに生きられたのです。そのお陰で、今日のご家族の幸福な人生がもたらされたのでした。姉の蒔かれた良い種が豊かな実を結んだのでした。

一人の女性がその人生で成し遂げたことの計り知れない価値、尊い犠牲、長年にわたる愛情、人間ですから弱さも、肉体の限界も心沈めることもあったでしょうが、家族や周りにいる人々のために全生涯を費やされたことに、本当に頭が下がります。加藤姉は、臨終の床でご主人様に「私の人生は幸せでした。」と感謝して生涯を閉じられたのでした。この様に立派な女性をSDA教会に持つことができたことを、私は誇りに思います。

聖句と私

「よく聞きなさい。心をいれかえて幼な子のようにならなければ、天国にはいることはできないであろう。」(マタイによる福音書 18章3節) 村崎 由里

「あっママ、ほらそこに天使が。」と娘の遥香の一言にドキッとすることがあります。やはり子どもには見えるのでしょうか、いつの間にか目がふさがれてしまった自分が悲しくなることがあります。また我が家では、食事の時のお祈りを順番にすることにしています。娘の祈りの時には、大変不謹慎ではありますが、吹き出しそうになることも度々ありますが、教えられることも多いです。娘がその日の出来事を感じたままに自由に神様にお話しして、必ず家族やお友達の名前を一人ずつあげて、「みんな大好きです。」と祈るのを聞くと、いつもお願い事ばかりの自分の祈りが恥ずかしく思えてきます。

私にとってこの聖句にある「幼な子のように」とは、くもってしまった私の目に代わって、イエス様が幼な子の目を通して語りかけて下さる言葉をしっかり受け止めることだと思っています。神様が、この子と共に私にも成長する機会を与えて下さったことを心から感謝しています。

「まず心に水遣りを」

熊谷 幸子

片山義博さんという名をご存じだろうか。おそらく日本で今もっとも信頼のおける知事である。鳥取県の激減する人口にも拘わらず、政府が一向に予算額を改定しないことに疑問を持ち、予算の削減を申し入れ実行されたことで一躍有名になった。

彼は言う。「どんなに新しく道路を造り、橋を直しても人口は流出していく」(日本居住福祉学会の設立記念シンポジウムに於いて)

何故か。「それはお上^{かみ}が、民の本^{たみ}に何をどうして欲しいのか、という心の要求に応えていないからである」と。

先日NHKの有識者の討論会の中で、大多数が「経済優先」を掲げ、数字で閉塞した現状を打開しようと力説していたのに対し、片山氏だけが、効率の悪い時間のかかる「教育」の大切さを、今こそ見直すべき時と訴えていたのが大変印象に残った。

バリアフリーの大合唱が起こる度、私は先記の片山知事の言葉を思い出す。よりよい環境づくり、その一つのバリアフリーに異存のあろうはずはない。私自身時折膝の痛み^{かみ}に苦しむことがあって、エスカレーターがあれば、と願う。願う一方で、あれもこれも備われれば、教会は、バリアフリー議事録一号の筆頭に掲げられてあった「より霊的で情緒ある教会」に変貌できるのだろうか。それが全く別問題であることは、誰しも気付いているはずだ。

某日忙中閑に、今年の教会員名簿を開き、言葉を交わし顔を思い出せる方にマルを付けて数えてみた。617名中177名。この数が多いか少ないかは解らない。けれど兄弟姉妹の約七割を知らないというのは、自省を込めて、やはり少しおかしいのではないかと思った。

心から物へと時代が爆走し続ける中、生きることへの優しさをなくした社会、益々、記号化無人化していく人間関係にあって、私達は、どんな心の受け皿を用意しているのだろうか。いけるのだろうか。

7月21日、教会の玄関口の花を過ぎたアジサイが枯れんばかりに喘いでいた。根本の上は干からびカラカラで、帰る前に誰かの協力を得てたっぷり水を施そうと思っていたのに、忘れて教会を出たことを、象徴的な出来事として、今とても後悔しながらこの原稿を書いている。

一つの提案

7月第一週の安息日の食事のとき、隣で一緒に食事をしている姉妹の手許を見ると、私の使っている物と違います。それは明らかに“私の箸”いわゆる「マイ・チョップスティックス」です。私は頭をガンと殴られた思いでした。以前、外食時に“私の箸”を使っている外国の方をテレビ放送で見て、なるほどと同感したものの、実行に移せないでいたからです。この姉妹の行動を見て何てすばらしいことかと感動し、今度こそ実行しようと決心しまし

た。(実は、もうお一人発見しました!) そこで一つの提案を思いついたのです。現在、なにげなく使い捨てられている割箸も、環境破壊、はては地球温暖化につながるのではないのでしょうか。ちなみに、当教会で一年間に使われる割箸のことを考えてみました。毎週日本人とTIC合計で160人としますと、「160人×52週=8,320」という数字になります。

神様のくださったすばらしい自然を保つために、“私の箸”を始めてみませんか。

(女執事)

原宿彩

**大作『邑はずれ』が
いよいよ中央教会へ!**

「臼田画伯のエネルギーは、あのスリムなお身体のどこに秘められているのかしら?」この7月初め、臼田輝四郎さんの作品展を見た人は、誰しもそう思われたことでしょう。

「『邑はずれ』もステキだけど、私は『パウロ』も好き!」「私は『ワレモコウ』ですわ」- これは、わがコミュニケーション部・雅子茂子両女史の、声はずませてのご感想。

ご寄贈くださる大作『邑はずれ』の到着はまもなくです。ご期待下さい。なお、『産経新聞』8月7日夕刊の「芸術と平和の祈り」という特集記事の中で、この『邑はずれ』に関する記事が掲載される予定です。

臼田さんご夫妻



VBS彩影-大人も楽しめた3日間

去る7月23日~25日までVBSが集会室でもたれました。今年は児童20名、スタッフ総勢40名がさまざまな形で参加。初日は緊張のせい、子供達同士がなかなか馴染めない様子でしたが、2日目になると急にみな仲良くなり、打ち解けた雰囲気で大花火会

やお泊まり会を楽しんでいました。さらに天沼教会の青年達によって人形劇が行われ、大好評でした。壁一面に貼り巡らされた素晴らしい装飾、手話や振り付けを取り入れた賛美、大人気だった「ゲームの達人」出てくるだけで場が明るくなる「種まきお姉さん」、美味しい食事、いろいろな方々の才能が大いに発揮され、子供だけでなく大人も楽しめたVBSでした。最終日には終了礼拝が会堂で行われ、『威風堂々』の曲に合わせて修了証書を子供達一人一人に授与。子供達が今回の体験を通して、神様の存在を知って中央教会にくるきっかけになってほしいと強く感じました。(鈴木伴枝・花田ゆか)

あつ~い夏にホットな話題!

嬉しいお知らせが届きました。元東京中央教会副牧師、藤森大輔先生が7月3日(水)にご婚約! お相手は、青森娘かと思いきや、當 道子(あたり みちこ)さん。宣教師として海外へ渡るなど(以前『ライフ』にも特集されていました)大活躍されている素敵な方です。結婚式は11月11日(日)午後1時から東京中央教会にて。ほか詳細は教会宛にご案内状を送らせていただきますとのこと。さむ~い地に赴かれ心配しておりましたが、心配ご無用ですか!?

7月21日の安息日、木村光作さんが久々にお見えになりました。皆と握手を交わす姿に嬉しさが込み上げました。

『青い窓U・S・A』(二一年四月刊・第八号)より
在米の子どもの詩をこ紹介します。『青い窓』は、もともと福島県郡山市の和菓子のお舗「柏屋」から発行されている児童詩の定期刊行物です。NHKのTV番組で紹介されたのがきっかけで、その内容に感銘を受けたSDAハシエンダ教会カリフォルニア州サンガブリエルの藤田礼仁氏(六八)が後援者の一人となつて、交流が深まるうち、一九九六年一月、USA版が創刊されました。アメリカのSDAの生徒の作品がのつたこの冊子は以後毎年刊行されています。最近では「青い窓の会」郡山事務局から講師が渡米し、三育学院サンタクララ校と三育東西学園(ガデーナ)で、指導の先生方への講演や授業が行われたそうです。

「おばあちゃんの手」サンタクララ校 五年 中西彩乃

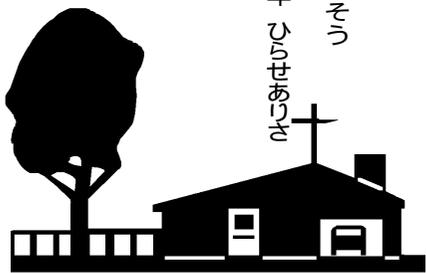
いとこの雪乃がぎゃんぎゃん泣いた。
私のだっこしても泣きやまない。
しょうがないので、おばあちゃんにわたしたら、
すぐ泣きやんだ。
おばあちゃん。
おばあちゃんの手はまほつの手。

「いす」三育東西学園 四年 中西美登子

いすは、人に買われてから、
いろんな人にすわられている。
太い人や細い人。
小さい人や大きい人。
なんだか、ちよつぱり、かわいそう

「私とあり」三育東西学園 三年 ひらせありさ

私とありと命はちがつ。
ありは私にふまれて死ぬが
ありは私をふめやしない。
私はじしんの時、
本だになつぷされる。
ありは九九パーセント
つぶれない。
私とあり どつちもどつち



牧師によるバイブル豆事典

渴き

暑い夏ですが、聖書記事の背景であるパレスチナの夏(6~9月)もかなり暑いようです。聖書にはイスラエルの民が経験した旱魃や渴きの記事が繰り返し記されています(創世記41:30、申命記8:15、ルツ記1:1、列王記上17:1,7,14等)。しかし、神の約束は、「もし、きょう、あなたがたに命じる私の命令によく聞き従って、あなたがたの神、主を愛し、心をつくし、精神をつくしてつかえるならば」(申命記11:13)時に従って雨を降らせ地の産物を与えてくださるというものでした。従って、時にかなった雨や豊かな産物は、神に対する心からの忠誠の祝福であり、渴きや飢饉は神に対する罪の結果と考えられていました(申命記28:47,48、イザヤ5:13、エゼキエル19:13)。イエス様が十字架の上で「わたしはかわく」(ヨハネ19:28)とおっしゃったのは、肉体的な渴きはもちろんです、それにもまして神との永遠の別離という、人類が通過すべき罪の結果を経験されたからでした。

一方、聖書はもう一つの渴きについてのべています。それは神を求める渴きです(マタイ5:6、詩篇42:1、2;63:1、143:6)。罪人とはいえ、神のかたちに造られた人には神を求める思いがインプットされています。従って、人は神に出会うときにのみ真の満足があたえられます。感謝すべきことに、「だれでもかわく者は、わたしのところにきて飲むがよい」(ヨハネ7:37)(イザヤ44:3、55:1)との招きを受け入れるとき、その渴きは完全に満たされるのです。

(東京中央教会牧師 板東洋三郎)

8月のスケジュール

教会のホームページを開設しています。
SDA東京中央教会のアドレス

<http://www.sda.gr.jp>

8 / 2(木) ~ 6(月) PFC夏期キャンプ

(天子の森キャンプ場)

/ 4(土) [説]シャロン・クレス GC牧師婦人会長
各部役員会

/ 5(日) 東京東地区プレ集会 10:00 ~ 会堂

/ 11(土) [説]板東洋三郎牧師 & 子供のお話
アドベンチストはらじゅく & 週報発送
小羊クラブ 14:00 ~ 集会室

/ 18(土) [説]武井今日子副牧師

/ 25(土) [説]板東洋三郎牧師 & 子供のお話
小羊クラブ 14:00 ~ 集会室

エデン
ED園だより

暑中お見舞い申し上げます先日、息子が4日間の短期水泳教室に参加しました。初日は、ほとんど泣いていたようですが、2日目からは元気に飛び跳ね、楽しんでいただとのこと最終日に見に行ってきましたが、先日まで水を怖がっていたのが嘘のように、先生の指示に従って友達と仲良く水泳(？)を楽しんでいました夏バテ気味の自分は、息子の成長ぶりと元気なのを見つづけられる毎日を送っています。時節柄ご自愛下さい。(YM)

*訂正 7月号俳句欄の第三句の「四絶」のふりがな「よひろ」は正しくは「よひら」です。お詫びして訂正いたします。(編集部)

発行：東京中央教会コミュニケーション部

* 発行人：板東洋三郎

[住所] 〒150-0001 渋谷区神宮前1-11-1 03-3402-1517

* 編集人：前中靖司

* スタッフ：佐藤敏子・寺内雅子・平山茂子・森武靖子・山口保夫